

埋文やまがた



2000年10月31日
第18号



遊佐町 小山崎遺跡出土の県内最古のドングリ

財團法人 山形県埋蔵文化財センター

YAMAGATA PREFECTURE ARCHAEOLOGY CENTER

〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301㈹ FAX 023-672-5586

2000年発掘調査トピックス

考古学年表

年代	時代	主なできごと	県内の主な遺跡	今年度発掘調査遺跡
60万年前 30万年前 13万年前 3万5000年前	旧石器時代	日本列島に入(原人)が住み始める 石斧、ナイフ形石器など日本列島固有の文化成立	袖原遺跡(尾花沢市)	
			富山遺跡(寒河江市) 上屋地B遺跡(飯豊町) 弓張平B遺跡(西川町) お仲間林遺跡(西川町) 角仁山遺跡(大石町)	
B.C.11000 (1万3000年前)	草創期	土器・石器の使用が始まる 貝塚の形成、土偶の使用が始まる	日向洞穴遺跡(高畠町) いるかい遺跡(尾花沢市) 月ノ木B遺跡(南陽市)	
B.C.4000 (6000年前)	興盛期	漆の使用が始まる 気候の温暖化、海が内陸に入る	一ノ坂遺跡(米沢市) 押出遺跡(高畠町) 吹浦遺跡(遊佐町) 西ノ前遺跡(舟形町)	小山崎遺跡
B.C.3000 (6000年前)	前期	太平洋沿岸に大規模な貝塚が成立	西海洞遺跡(村山市) 山居遺跡(西川町)	中川原C遺跡
B.C.2000 (4000年前)	中期	東日本で装飾豊かな土偶が作られる	川口遺跡(村山市) 泥部遺跡(上山市)	立泉川遺跡 かっぽ遺跡 高瀬山遺跡(HO)
B.C.1000 (3000年前)	後期	環状列石を持つ墓地・祭祀場が発達する 土偶・仮面・石刀等の祭祀盛んになる	宮の前遺跡(村山市) 長者屋敷遺跡(長井市) 北柳1遺跡(山形市)	沼向遺跡 小山崎遺跡
B.C.300 紀元前	萌生時代	鉄器使用始まる	生石2遺跡(酒田市)	
A.D.1 紀元前		近畿中国四国を中心に銅鋸が広まる 57 僕の奴国王、後漢の光武帝より印綬を受ける 239 邪馬台國の卑弥呼が魏に使いを送る	蟹田遺跡(東根市) 堂森遺跡(米沢市) 山形西高遺跡(山形市)	
300	古墳時代	大型の前方後円墳が各地に造られる	烟田遺跡(鶴岡市) 今塚遺跡(山形市) 福荷森古墳(南陽市)	
400		武器武具が盛んに埋葬される	下小松古墳群(川西町) 大塚天神古墳(山辺町) 菅沢古墳(山形市)	渋江遺跡 長表遺跡 藏増押切遺跡
500		538 百濟から仏像・經典伝来	大之越古墳(山形市) 西沼田遺跡(天童市) 物見台遺跡(中山町)	
600	飛鳥白鳳時代	645 大化の改新、律令国家の形成へ 各地で寺院造営され仏教が広まる	清水前古墳(高畠町)	
700	奈良時代	694 藤原京に都を移す		
800		710 平城京に都を移す 794 安平京に都を移す 802 坂上田村麻呂、忍沢城を築く	山崎5窓跡(平田町) 西谷地遺跡(鶴岡市) 大浦B遺跡(米沢市) 依田遺跡(八幡町) 城輪柵跡(酒田市) 山海窓跡(平田町) 八森遺跡(八幡町)	山上遺跡 四ツ塚遺跡 永源寺跡遺跡 石田遺跡 高瀬山遺跡(HO) 向河原遺跡
900	平安時代			
1000			堂ノ前遺跡(八幡町) 平野山窓跡(寒河江市) 古志田東遺跡(米沢市) 手藏田遺跡(酒田市)	
1100				
1200	鎌倉時代	1192 源頼朝、鎌倉幕府を開く	大船遺跡(遊佐町)	
1300		1274・1281 文永・弘安の役(元寇)	柳沢A遺跡(鶴引町)	
1400	南北朝時代		藤島城跡(藤島町) 山幡櫛跡(平田町)	
1500			米沢城跡(米沢市) 寒河江城跡(寒河江市) 大宝寺城跡(鶴岡市) 山形城跡(山形市)	
1600	室町時代	1467 応仁の乱、戦国時代へ 戦国大名が城館・城下を築く		
1700		1576 蔡田信長安土城を築く 1600 関ヶ原の戦い	亀ヶ崎城跡(酒田市) 新庄城跡(新庄市)	白鳥館跡
1800	江戸時代			
1900		城南一丁目遺跡(山形市)	米沢城跡 鶴ヶ岡城跡	
	近代・現代	1868 江戸が東京となる		

お住まいは
どちら？

遊佐町小山崎遺跡



縄文時代後期から晩期の水辺の作業場が見つかりました。クリ材の打込式の柱列や、湿地を渡る石敷き舗道があり、石敷き舗道は、日本最古です。

ここからは、丸木弓や木製品の製作途上のものとトチの実の殻が多数出土しており、水漬けにして木材を加工することやトチの灰汁抜き等の作業が行われていたことを物語っています。

居住域を探しての3年目の調査でしたが、まだ、当時の住まいの跡は見つかっていません。

水辺の作業場全景から（上空南から）



丸木弓：70cm程の短弓です。現存長は48cm。



柄の付いた製作途上の木製品。長さ179cm。



鉛状木製品の発掘の様子。長さ97cm。

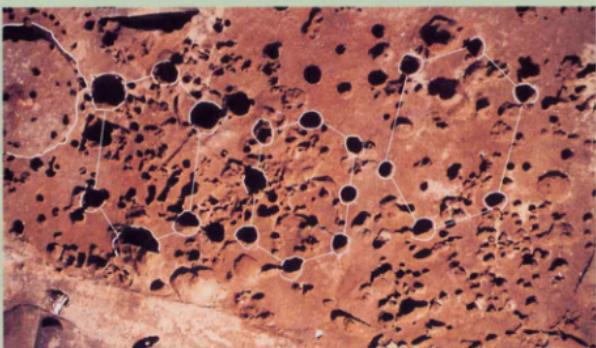


最上町かっぱ遺跡

縄文時代後期の
ムラが見えた！

遺跡全景（東から）

遺跡は北・東・西の三方を山に囲まれた谷あいの沢筋に存在します。多くの住居跡と建物跡・土坑群が見つかったほかに、470箱もの遺物が出土し、県内の縄文時代後期の遺跡としては、貴重な資料となることが期待されます。



六角形の柱配置をもつ掘立柱建物跡群



竪穴住居跡から出土した遺物
(左: 注口土器、右: 深鉢)



竪穴住居跡（中央に炉跡がある）

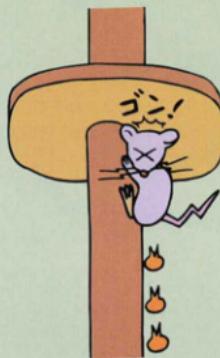


古墳時代（5世紀）の堅穴住居跡の下から、楕円形の穴が6基見つかりました。長さ約1.2m、深さ50cm程の穴で、底には礎板（そばん）が敷かれていることから、大型の建物の柱穴群とわかりました。中央の柱穴が外側に張り出しており、棟持柱をそなえた大きい建物であったと考えられます。

このような建物は、祭りごとにかかわる祭殿であった可能性が高く、県内では初めての発見となります。



ネズミ返し板材の転用と思われる礎板



ネズミ返しの図



↑真ん中に床を支える柱のある倉庫です。

南山形地区にある本沢川の扇状地から倉庫と考えられる20棟あまりの建物跡が見つかりました。建物は整然と向きを同じくして立ち並び、上の写真のように堀で囲まれたものもあります。また、中にはクリ材を使った柱根が残っているものもあります。

→太い4本の柱の周りを溝で囲まれた建物跡です。





湿地を渡る 中世の敷石道路

東根市小田島城跡

湿地を渡るための石敷きの道路が見つかりました。

写真上は14世紀中ごろと思われる道路跡で、わきに大きな石を並べ、路面にはこぶし大の石を敷きめています。

また右の写真は、この道路の50cm上から見つかった新しい時代（15世紀初頭）のもので、20～30cmの平らな石が幅1～1.5m、長さ12mに渡って並べられていました。



→遺跡から出土した日常の生活に使われた瀬戸産の陶器です。
中央のものは牡丹文様が描かれた14世紀ごろの水注（みずさし）です。

国指定史跡

高畠町 日向洞窟

秋晴れの日、日向洞窟のある尾根を歩くと、透明感のある甘い香りがゆっくりとただよってきます。大きな粒を実らせたぶどう畑が、洞窟の周りに広がっています。洞窟の入口前の広場は、日向の地名が似合う、とても居心地の良い場所です。

日向洞窟は、山形県高畠町の北西部、大きな岩が連なる立岩と呼ばれるところにあります。昭和29年、その立岩の洞窟や岩陰で、昔の人々が生活した跡が発見されました。その後の発掘調査の結果、縄文時代草創期（約12000年前）から奈良・平安時代（約1200年前）まで利用されていたことが分かりました。特に、洞窟から出土した縄文土器の一部は、日本の土器の中で最も古い段階に位置づけられ注目されました。これらは、縄文文化の始まりを解明するカギを握る資料の一つとして知られています。最も大きな第1洞窟は、入口の高さ1.5m、幅4m、奥行き9.5mで、ほぼ真南を向いて開いています。内部は、日中でも薄暗く、外から見る以上に奥行きがあります。洞窟には、当時の食生活や自然環境を考えることができます。ウサギ・クマ・シカ・イノシシ・ハクチョウ等の骨や貝殻が残されていました。自然の産物である洞窟を利用した、縄文時代の人々のくらしがよみがえります。

昭和62年、日向洞窟の西側、約150m地点の西地区の調査が行われました。縄文時代草創期の懸穴住跡が確認され、当時の生活の場が洞窟周辺で繰り広げられていたことが見えてきました。周辺の住まいの様子が調査されることにより、洞窟が生活のなかでどのように使われていたのか解明できると思われます。

日向洞窟は、地元の方々が年数回、美化活動を行う等、地域の中で大切に守られています。現地に立った時の居心地の良さは、長い間人々が生活していたぬくもりと、それを常に感じて洞窟を大切にしている地域の方々の心が伝わってくることによるのでしょうか。

（高桑弘美）

Illustration © Kurosaka Hironori

前号の遺跡散歩に誤字がありましたので訂正いたします。日新戦争→日清戦争

「埋文やまがた」の購読について

広報誌「埋文やまがた」購読ご希望の方は、当センターまで電話にてお問い合わせ下さい。なお、郵送料はご負担いただきます。

電話 023(672)5301 (代表)



紅葉の美しい日向洞窟



土器

約12000年前の道具
(西地区出土)



資料提供：高畠町教育委員会

▪ 编集後記 ▪

今年度の発掘調査も大半の遺跡で終了し、残る現場も終盤を向かえています。今後は室内にて出土品の整理に追われる毎日です。

次回の当紙は2001年2月に刊行予定です。21世紀の最初の「埋文やまがた」もお楽しみに！（新）